

June 7, 2026

寛容・御霊の実

ピリピ 4:4-7

4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

4:5 あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。
主は近いのです。

4:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

4:7 そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と
思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

ガラテヤ 5:22-23 には9つの「御霊の実」が挙げられています。これは3つづつに分けることができます。最初の「愛、喜び、平安」は神との交わりによって生まれるもの、次の「寛容、親切、善意」は人との関わりの中で働くもの、そして最後の「誠実、柔和、自制」は自分自身のために必要なものです。

「寛容、親切、善意」の3つは、人間関係を良くするものですが、「寛容」はその出発点です。

一、寛容とは

ガラテヤ 5:22-23 で使われている「寛容」は、もとの言葉で「マクロスミア」と言います。「マクロ」に似た言葉で、反対の意味を持つのが「ミクロ」、あるいは「マイクロ」です。

「マイクロ」は小さいものを表わします。マイクロフォンは小さな音も拾うことができるので、「マイクロ」という言葉が使われています。これに対して「マクロ」は、大きなものを指します。年配になると小さな文字が読みにくくなります。かつては虫眼鏡が使われましたが、今ではスマートフォンが使われま

す。スマートフォンのカメラを「マクロ・モード」にすれば、小さな文字を大きく拡大してくれ、はっきり見ることができます。ですから、ギリシャ語の「寛容」（マクロスミア）は、大きな心、広い心という意味になります。すべての良い人間関係は、大きな心、広い心で相手を受け入れることから始まります。

イエスは「寛容」についてこう教えられました。「与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懷に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです。」（ルカ 6:38）昔は穀物は枡に入れて量りました。ふつうは穀物を枡ですくったあと、盛り上がった部分をすりきり棒で落として正確に、一升とか一合にします。ずるい穀物商は枡の中に、わざと親指を入れてすりきり棒を使い量をごまかしたりしますが、気前の良い穀物商であれば、詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして量ってくれ、それを「懷に入れ」てくれるのです。

「懷に入れる」というのは、穀物を買物に來た人たちが身に着けているエプロンを広げ、そこに穀物を入れてもらい、それを懷にかかえて持ち帰ることを指しています。エプロンが大きければ大きいほどたくさんものを持って帰ることができます。エプロンが風呂敷のように使われたのです。

風呂敷といえば、私の子どもころ何でも風呂敷に包んで持ち運びしたのを思い出します。よく親戚の家に風呂敷包みを持って使い行きました。風呂敷ごと渡すと、風呂敷と一緒にお駄賃が返ってきたのがうれしかった思い出があります。日本では簡単な民事裁判はすべてオンラインでできるようになり、書

類を使わなくなりましたが、法廷での裁判のとき、弁護士は、今でも資料をカバンではなく風呂敷に包んで持ち運びするのだそうです。アタッシュケースは頑丈で格好のいいものですが、そこには限られたものしか入りません。スイカをまるごと入れることはできません。けれども風呂敷ならできます。風呂敷はたった一枚の布切れにすぎませんが、丸いものでも四角いものでも、平らなものでも、どんな形のものでも受け入れ包み込みます。それは、広い心で人に与え、また人からのものを受け入れる「寛容」に似ています。私たちもものごとを量るのに大きな枡を、人を受け入れるのに大きな風呂敷を持っていたと思います。

二、イエスの寛容

しかし、私たちはどのようにしたらこの「寛容」を持つことができるのでしょうか。もちろん、それは「御霊の実」ですから、聖霊が私たちに与えてくださるものなのですが、聖霊はどのようにして私たちに「寛容」の実を实らせてくださるのでしょうか。

聖霊のお働きをを考えると、忘れてはならないのは、この言葉です。「御霊はわたしの栄光を現されます。わたしのものを受けて、あなたがたに伝えてくださるのです。」（ヨハネ 16:14）聖霊はイエスのものを受けて私たちに与えてくださるのです。イエスは「ぶどうの木」、私たちはその「枝」です。ぶどうの枝はぶどうの幹につながっていてこそ実を結ぶことができます。聖霊は私たちをキリストに結び続けてくださるお方です。ぶどうの木から枝へと流れる「命」の役割をなさるのです。聖霊さえいらっしゃればイエスは要らないと言うなら、そ

れは大きな間違いです。聖霊は常にイエスとともに働き、イエスから受けたものを私たちのうちに届けてくださるのです。

それは「寛容」も同じです。聖霊が私たちのうちに結んでくださる「寛容」はイエスの「寛容」です。イエスは、決して人を分け隔てなさいませんでした。イエスはガリラヤ地方で育ち、その地で宣教を始めました。ガリラヤ地方は、ユダヤでの生活がままならない人たちが開拓したところです。エルサレムを中心とするユダヤ地方の人々からは歴史も伝統もなく、貧しく、無学な人々しかいないところと思われ、さげすまれていた場所でした。けれどもイエスは誰をも先入観で判断したり、偏見によって斥けたりしませんでした。イエスは漁師や取税人から弟子を選びました。弟子たちはイエスとともに過ごした3年ほどの間にエルサレムの学者たちも驚くほどの知恵を与えられました。

また、この時代には女性は人数にも数えられないほど低くみられていましたが、イエスは彼女たちを大切に扱いました。七つの悪霊に憑かれていたマグダラのマリアから悪霊を追い出し、彼女を復活の使者として用いられました。長年病気で苦しんできた女性たちを癒やし、子どもを生き返らせて母親たちを慰められました。人の数に数えられないといえ、若い子どももそうでしたが、イエスは、弟子たちが子どもたちを追い払おうとしたとき、弟子たちを叱りつけ、「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです」（マルコ 10:14）と言われました。さらに、当時ユダヤ人が絶交していたサマリア人、しかもサマリアの女性にご自分が救い主であると証しされました。全くの異邦人であるカナン人の母親の信仰に答え、その子を癒

やされました。そして、十字架の上ではご自分の隣に十字架につけられた強盗に天国を約束されました。イエスは救いを求める者を誰一人拒まれませんでした。私たちは、このイエスの「寛容」によって救われ、また救われ続けているのです。

三、神の寛容

そして、イエスの「寛容」は同時に父なる神の「寛容」です。旧約の神である父なる神は「非寛容」で「怒りの神」ですが、新約の神であるイエスは「寛容」で「愛の神」だなどと言われることがあります。それはまったく間違った説です。イエスは父なる神の「非寛容」をご自分の「寛容」でなだめられたのではありません。聖霊がくださる「寛容」がイエスのものであるように、イエスの「寛容」も父なる神が持つておられるものとまったく同じなのです。イエスはヨハネ 16:15 でこう言っておられます。「父が持つておられるものはすべて、わたしのものです。」ですから、私たちがいただく「寛容」は、まず父なる神がお持ちのものであり、御子イエスが世に現して下さったものであり、聖霊なる神がそれを私たちに与えてくださるものなのです。

パウロは、かつてユダヤ人としての伝統に生き、律法を守ろうと懸命に努力した人でした。律法を守ることによって救われようとしたのです。そして、神に対する熱心を示すために律法にイエスをキリストと信じる人々を迫害していました。しかし、天からの光に打たれ、イエスの声を聞いたとき、彼は自分がしてきたことが大きな間違いだったと知りました。それがどんなに愚かで罪深いことかを悟りました。そして、パウロはイエス・キリストを信じる者となったばかりか、イエス・キリス

トを宣べ伝える使徒となったのです。そのパウロはこう言っています。「しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」（テモテ第一 1:16）自分が救われたのは神の「寛容」、キリストの「寛容」によってだと言っているのです。パウロは自分を救いに導いた神の「寛容」をほんとうによく知っていました。だからこそローマ 2:4 では、「それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか」と言って、神の「寛容」を決して軽んじてはいけない、それに答えて悔い改めなさいと勧めているのです。パウロのように、罪深い自分が救われたのは神のあわれみ、恵み、寛大なお心以外の何によってでもないということが分かれば分かるほど、私たちは他の人に対してより寛容になれると思います。

きょうの箇所、ピリピ 4:5 には「あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい」と教えられています。「すべての人に知られるように」というのは、クリスチャンにも、まだクリスチャンでない人にもという意味です。人々がクリスチャンを見て「寛容」という言葉を思い起こすほどになさいということです。けれども、その前にまず身近な人から「寛容」を実践したいと思います。親しい関係であればあるほど寛容になれると考えがちですが、案外そうではなく、自分には甘く、人には厳しい態度で接してしまふことがあります。それでは良い人間関係を築くことができません。互いに寛容、寛大であることは個人と個人の間でも、グループとグループとの間でも、また大きくは国と国との関係でも大切なことです。そ

れによって無用の争いを避けることができます。きょうの箇所には4節に「喜び」、6節に「感謝」と「祈り」、7節に「平安」という言葉が書かれています。互いに寛容であるなら、そこには「喜び」や「感謝」、そして「平安」が、また、世界の平和も生まれてくるのです。

「寛容」は、もちろん、信仰や福音の真理に関して人々と妥協することではありません。不正を見逃してうまくやっていくということでもありません。クリスチャンには信仰のことで決して譲れないものがあります。だからこそ、それ以外のことで誰よりも「寛容」でありたいと思うのです。それによって真理を守り信仰を証しするためです。私たちはみな神の「寛容」によって救われました。そのことを心から感謝し、御霊の実である「寛容」が豊かに実り、それを実際の生活の中で働かせることができるよう願い求めたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、あなたはじつに寛容なお方です。あなたは、私たちがそれを見て学ぶことができるよう、その寛容を御子イエスによって私たちに示してくださいました。そればかりか、イエスの寛容を御霊の実として私たちのうちにも宿らせてくださいました。どうぞ私たちが聖霊に従順な者とし、あなたの寛容を受け取り、それによって生かされ、また、それを人々に示す者としてください。私たちは寛容でありたいと願いながら、自分の力でそれをしようとして失敗してきました。今こそあなたに信頼し、イエスに目を向け、聖霊の力によって寛容な者となれますよう助け、導いてください。イエス・キリストのお名前です。